大教センター通信

No.2
2013年3月号

「大教センター通信」の発行によせて

大学教育機能開発センター長　森井　俊廣

高等教育を取り巻く環境は目覚ましく動き、進展しています。現場で教育に携わる教職員の皆さまには、しかしながら、日増しの多忙により、この進展を知り自身の教育実践に取り入れていくのがなかなか難しい状況になっているのではないでしょうか。教育・学生支援機構大学教育機能開発センターでは、理論と実践の橋渡しとして、「大教センター通信」を発行し、広く教職員の皆さまへ高等教育にかかわる情報・知見をお伝えしていきたいと考えています。

「大教センター通信　No.2」では、まずは、優れた教育実践のご紹介ということで、平成24年度新潟大学学長教育賞を受賞されたお二人のうち飯島淳彦先生から、日々の授業設計への思いを語っていただきます。もう一人のアンニャ・ホップ先生には、紙面の都合で、次号にご登場いただく予定です。続いて、この1月に開催された新大キャンパスミーティングを速報の形でご紹介します。学生と大学が学士課程教育に関わる課題を共に考え、意識の共有を図ろうとするものです。学長を交え、学生の皆さんの活きいきした発言が伝わってくるかもしれません。最後に、最近の高等教育に関わる重要な話題の一つである初年次教育を取りあげます。その取組みの全国的な動向をながめたのち、本学で動き始めたNBAS、ならびに多くの学部で取り組まれているスタディ・スキルズとの関わりをご紹介しています。

2012 AWARD　平成24年度学長教育賞受賞者

ハイテク世代のローテク不足を刺激する授業を目指して

自然科学系（工学部 福祉人間工学科）
飯島　淳彦

スマホが当たり前になりつつある今日だが、それらの機器をド真ん中で使う学生は小さい頃から様々な電子機器と触れ合いながら大人になってきた。パソコン、携帯型ゲーム機、携帯音楽プレーヤーなど当たり前のハイテク*世代である。学校の授業スタイルも時代とともにハイテク化してきた。特にAV機器の進歩や電子教材の多様化も目覚ましい。リアルな動画はワンクリックでスクリーンに上映、魅力的なコンテンツの全てはパワーポイント（以下パワポ）に仕込まれている。このような環境にいると、学習は捗る一方で学生の多くは明らかにローテク**不足になるのではないかと感じる。一昔前は、板書に手書きプリント、お手製教材のいわゆるローテク授業しかなかったはずなのに。

さて、パワポを使わないで板書で授業を進めると学生からは文句が出るどころか、もっと沢山書いてくれと懇願される。確かに小学生の頃は黒板の文字を一生懸命ノートにとったものだ。そして何冊も○△学習帳を消費していった。大学生になった途端、状況は変わり、大学ノートと呼ばれる大学生が使うであろうノートは最後のページに到達しないまま途中で役割を終えることが多い。

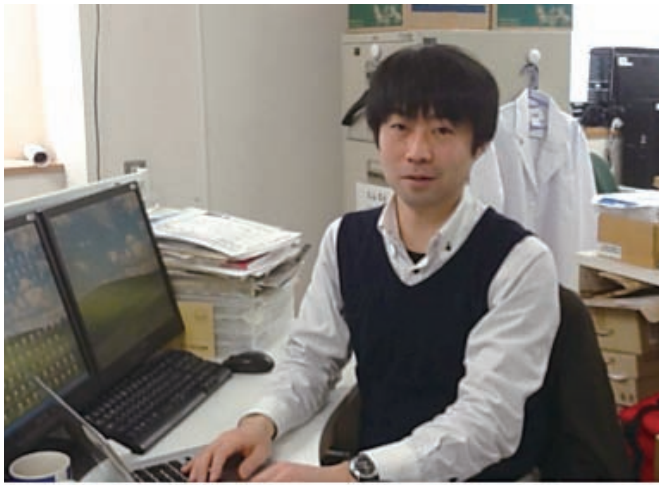
教室に眼を向ける。授業中に手を挙げて何か意見を言ったのは、一体いつのことやら。みんな昔は、我先にと手を挙げ発言していたはずなんだが。。。授業中の大学生は一般的にはとてもおとなしい。ケータイから全世界にコメントを発信するのは得意なハイテク世代も、何もしなければ教室ではかなり寡黙。

明らかにローテク不足の学生たち、このままではひたすらパワポを見てわかった気になって大学生活を過ごしてしまう。

90分間放置させないで時空間を共有したい。人体の不思議や機能とその応用について身を以て学習させたい。そこで4つの試みによって濃厚な90分を提供したいと考えた。1.教室内をうろうろして、インタビューによって学生の意見を引き出す、2.教室で具体的なモノを見る、触れる、実験する、3.授業に関する質問・コメント・日々の様子は「つぶやきシート」に記述する、4.良いレポートを供覧する。学長教育賞受賞を機に4つの試みを振り返ってみると全てローテクだなぁとつくづく感じる。ローテクは不思議と全身を使っていたことにも気付く。手を動かして書く。声に出して自分の考えを披露する。時には面白いことを言おうと思案する。自分の思いをつぶやき、他者の意見にも耳を傾ける。人のレポートを見て他者の良さを知り奮起する。感覚系と運動系をフルに使い、笑い語らい共感し情動反応までも引き起こしながら90分を過ごせればどんなによいだろうか、そんな授業を目指して試行錯誤している。その試みに賛同し積極的に授業に参加してくれた学生が多くいてくれたことを心からうれしく思う。来年度はまた新しい試みを取り入れていく。無論、ハイテクを否定するつもりは毛頭ない。私だって日々ハイテクの恩恵にあずかっているのだから。ハイテクとローテクを組み合わせたハイブリッド型の授業でローテク不足の学生の心を刺激し、ローテクを補充しながら授業を進めていきたい。

* ハイテク：High technologyの略。先進的な応用技術。IT技術などが含まれる。

** ローテク：Low technologyの略、ハイテクの逆。旧式の、古典的な方法。



平成24年度 新大キャンパスミーティングの速報

平成25年1月22日、16時30分より18時まで、総合教育研究棟B棟355講義室にて、平成24年度新大キャンパスミーティングが実施されました。このミーティングは、学生と大学側がともに本学の教育理念である「自律と創生」を協同して実現していくことを目的に、大学の教育改善活動（ファカルティ・ディベロプメント）の一環として昨年から実施されています。

このような学生と大学側がともに大学の教育について話し合う機会は、過去約10年にわたり「学生との対話集会」として、主に「教養教育（現在の全学科目）」をより充実した教育にすることを目的に行われてきましたが、昨年度からは、新たに新大キャンパスミーティングと名称を変更し、全学科目を中心に専門分野ごとの主専攻プログラムをこえて、学士課程教育としての共通の課題について、学生と大学側とが共に考え、改善のための提案をし、今後の課題解決に向けての意識の共有化を図る場となっています。

当日は、前半の部として、最初に学長からのプレゼンテーション、つづいて学生グループからのプレゼンテーションが行われ、後半の部として、学長、学生グループ、そしてフロア参加者を含めた全体での討論が行われました。

学長のプレゼンテーションでは、新潟大学の教育理念である「自律と創生」や学長が期待する学生像などについて、学長自身の学生時代の思い出を含めた話題が提供されました。

学生グループのプレゼンテーションでは、当日に先立って11月から準備してきたワークショップ参加者の中の有志5名、櫻井力也さん（農1年）、小林幸暉さん（理2年）、今井万由子さん（人文1年）、高野洋行さん（人文2年）、渡邊和敏さん（理1年）が、話題提供を行いました。

事前準備のワークショップには、各学部推薦の学生約30名が集まり、自分たちなりの「自律と創生」についての意見交換や、このミーティングで「学長に質問したいこと」「学長に聞いてもらいたいこと（要望）」についての意見収集を行いました。プレゼンテーションを行った学生グループの5人は、この

ワークショップで集約された意見をもとに、大学教育の本質や実際の状況での課題などの発表内容について議論を重ね、発表のリハーサルを含めた準備を行い、当日の発表に臨みました。

発表では、履修に関することとして聴講許可の問題、専門科目や副専攻の問題、授業に関することとしてディベート型授業の必要性、その他自主的な学習場所の必要性など施設に関わる要望、そしてそうした課題について、学生と教職員がもっと頻繁に話し合い協働する提案が出されました。

後半の全体討論では、フロアで参加した学生たち、教職員から活発な意見が出され、「時間があっという間だった」と感想が出るほどでした。当日の各プレゼンテーションや全体討論、参加者のふりかえりなどの詳細な内容については、別途作成中の報告書をぜひご覧ください。

大学教育コラム　Column

初年次教育の動向

大学全入時代になり、本学でも学士課程の学生について「年々、幼くなっている」「勉強の仕方がわかっていない、レポートが書けない学生が増えている」などの声を聞くことがよくあります。そうした状況は、本学のみならず今や全国的な問題になっています。そして、その問題解決策として多くの大学が初年次教育を重視しています。

初年次教育とは、「高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム」（中教審答申2008年）のことです。2007年の調査(山田2010)では、実に97%以上の学部が何等かの初年次教育を実施しています。国際的にも、アメリカをはじめ世界20か国以上でこの教育が導入されています。初年次教育を主題とする関係学会や団体も設立されて研究も進み、初年次教育は、学生の中退率抑制や大学における学習経験の「成功」に有効であると評価されています。また、初年次教育の問題は同時に高校教育までの学校教育と大学教育との接続の問題でもあり、中央教育審議会レベルではそうした公教育の接続についての議論も始まっています。

初年次教育の教育内容は、大学や学部によってさまざまですが、共通する内容としては、「レポート・論文の書き方など文章作法」「コンピュータを用いた情報処理等基礎技術」「図書館の利用・文献検索の方法」「プレゼンテーションスキル」等の基礎的なアカデミック・スキルのほか、「自立した自己学習の基礎」や「学生生活での時間管理や学習習慣の確立」のような学習者としての基本を身に着けさせる内容や、「論理的思考力や問題発見・解決能力」などの分野を超えた汎用的な能力の育成などがあげられます。

これらの初年次教育の中で、「自立した自己学習」や「学習習慣の確立」「論理的思考力」などのような内容については、初年次にとどまらず継続的な教育が必要であり、そうした初年次から卒業まで、さらには卒業後の学習への継続性を期待する学習支援ツールとして、学習ポートフォリオの作成を教育プログラムと並行して導入する大学も増えています。本学で現在構築中の学習支援システムである新潟大学学士力アセスメントシステム(NBAS)の中のeポートフォリオ部分も、そうしたツールとして活用することが可能です。

本学では今、そうしたツールを活用した初年次科目の開講や、学生のアカデミック・スキルの獲得を重視したスタディスキルズ科目の再構成などの取り組みを始める学科があり、教育・学生支援機構もそうした取り組みの支援を行っています。3月13日の「教育学習研究フォーラム」では、そうした取り組みの紹介を踏まえて初年次教育の可能性や課題を考える全学FDを実施します。

大学教育機能開発センター　准教授　加藤かおり

Information

FDのお知らせ

1 新任教員のためのFD

新任教員のためのFDとして3日間にわたる新任教員研修を実施しました。研修は、①オリエンテーション（6月）、②学習教育ワークショップⅠ（1回目9月6日、2回目9月11日、2つの回は同じ内容）、③学習教育ワークショップⅡ（1回目11月5日、2回目11月8日）で構成されており、②では、本学の教育理念や最近の高等教育事情や枠組みについての最新情報を提供しつつ、現代的な教育デザインの意味や方法について、③では、マイクロティーチングによる授業実践のふりかえり、90分のレッスンプラン作成など、具体的な授業実践および改善の方法について、より実践的に考えました。

最終課題としてのポートフォリオを県内の他大学からの参加者を含む10名の方が提出し、修了証を授与されました。

2 ミニFD・学科単位の教育改善の支援

大教センターでは，各学部学科のご要望にあわせた1、2時間程度のセミナーやワークショップなどのミニFDや、学科単位の教育改善の支援も行っています。今年度は、例えば、経営学科のスタディスキルズ科目の改善を支援しています。お気軽にご相談ください。

本通信への投稿原稿を随時募集しています。ご関心のある方は下記までお問い合わせください。

お問い合わせ
新潟大学 教育・学生支援機構 大学教育機能開発センター
担当：加藤　kaori@ge.niigata-u.ac.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。